様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 15 日現在

機関番号：32702
研究種目：基盤研究Ｂ（海外）
研究期間：2009　～　2011
課題番号：21401040
研究課題名（和文）　アフリカ無形文化遺産存続の条件を探る

研究課題名（英文）　In search of the conditions to sustain intangible cultural heritages of Africa.

研究代表者
川田　順造（ KAWADA JUNZO ）
神奈川大学・日本常民文化研究所客員研究員
研究者番号：50107835

研究成果の概要（和文）：1995 年以来、語りや踊りも含む「音文化」という概念の下に、ユネスコとの連携で続けている我々の研究対象は、ユネスコの観点からすれば無形文化遺産に他ならない。2009~2011 年の研究期間には、研究代表者 1 名、研究分担者 3 名、連携研究者 2 名によって、アフリカ西部（ブルキナファソ、ベナン、コートジボワール)、アフリカ東部（エチオピア、タンザニア、ザンビア）における、さまざまな音文化＝無形文化遺産の存続の条件を、それを支えている地域集団との関係で探求した。一方ユネスコの側からは、当該の文化遺産が現在その地域社会で機能していることを、無形文化遺産として登録される前提条件としており、文化的・歴史的価値だけでは登録できない。現地地域集団にとっての意味、研究者の視点からの価値判断、国際機関が提示する条件、三者の関係をどのように考え、現実に対応して行くかが今後の課題だ。

研究成果の概要（英文）Since 1995, we have conducted anthropological field research in several areas of Africa, under the concept of “sound culture”, which includes the oral literature, as well as the dance accompanied with vocal or instrumental sound. These performing arts are, from the viewpoint of UNESCO, nothing but the intangible cultural heritages in crisis. Six members of our project have conducted their field researches, during the period between 2009 and 2011, in western parts of Africa -- Burkina Faso, Benin and Ivory Coast --, as well as in its eastern parts -- Ethiopia, Tanzania and Zambia, on the survival conditions of several sound cultures, or intangible cultural heritages, in relation to the local community which sustain them. From the standpoint of UNESCO, the actual vivid function in the local community is the necessary condition to recognize it officially as an intangible cultural heritage to be protected, and its cultural or historical value alone is not sufficient. The relationship between the significance of an intangible cultural heritage for the local community, the viewpoint of the researcher, and the conditions required by the international organism, is the question not only to be studied, but also to be resolved.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	5,900,000	1,770,000	7,670,000
2010 年度	5,200,000	1,560,000	6,760,000
2011 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度			
年度			
総　計	13,100,000	3,930,000	17,030,000

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：アフリカの無形文化遺産
キーワード：1）アフリカ、2）太鼓音による歴史表象、3）歌舞による歴史表象、4）伝統の現代化、5）都市における歌舞、6）音文化職能集団、7）薄板列体鳴音具、8）地域社会

１．研究開始当初の背景

ユネスコは 2003 年以来、松浦晃一郎事務局長の発案で登録・保護すべき世界の文化遺産に、「無形文化遺産」を加えた。それまでの石造の建造物を主とする有形遺産においては、全体の半数近くまでがヨーロッパで占められ、地域的な偏りが著しかったのを、文化遺産の範囲を広げて、是正することを目的としていた。

だが、アフリカの無形文化遺産の「音文化」（語りや踊りも含む）については、広く関心が持たれていながら、地域が広大である上に形態も多様であり、ユネスコの無形文化遺産への登録の可能性も含めて、その現状や未来、その音文化とそれを支えている地域共同体との関係についても、十分な現地調査がなされていなかった。

他方、ユネスコへの登録の申請には、きわめて煩瑣な申請書の作成と、その無形文化遺産が存在する国の政府による支援協力が、必要である。無形文化遺産を支えている「共同体」が主体となった申請が求められる。

だが、現実には多くの場合、フランス語、英語など旧植民地宗主国の言語が、現地社会の公用語であるため、地元共同体の成員で現実に当該の無形文化遺産に関わっている者、とくに責任者である高齢者などは、フランス語あるいは英語で書く能力を持たない者が多く、直接申請書作成に関わることができないという矛盾した状況が、前提としてある。

また、ユネスコが登録を認める条件の一つとして、その無形文化遺産が、現に社会的機能を持っていることが挙げられている。だが、十分な社会的機能を持っていれば、日本の無形文化遺産として認められている歌舞伎や能のように、経済的にも興行として自立出来、したがってユネスコのお墨付きを受ける必要はないものが、無形文化遺産として登録され、アフリカの、現在社会的機能はなく、消滅の危機に瀕しているが、文化遺産として価値の高いものが、登録による保護を受けられないという矛盾が生じる。

たとえば本研究計画で代表者の川田が長年調査研究してきた、旧モシ王国での、「太鼓ことば」による王朝史の「語り」のように、現在の時点では消滅の危機に瀕しており、従って社会的機能もないが、独自の言語伝達システムとして、世界に他に類のない貴重な文化遺産でも、ユネスコへの登録従って、財政的保護も受けられないという、矛盾した状況にある。

また、申請登録には、当該国政府の全面的後押しが必要であるため、政府の観光政策と結びついたものが登録されやすいという偏向が生じる。

２．研究の目的

この研究は、アフリカの地域社会において現に意味を持ち続けている、さまざまな音文化の現状を、それを支えて来た地域共同体と関連で、ユネスコの無形文化遺産への登録が求める条件も考慮しつつ、明らかにすることを目的としている。その際、元来生きて機能している音文化を、その動態的側面、つまり「文化遺産」としてミイラ化されて保存されるのではない、それが元来地域社会のなかで変化しつつ果たしてきた役割に注意を払って、実態を捉えることに力を注ぐよう努めた。

３．研究の方法

既存の資料は最大限に活用しながらも、それのみに頼らず、あくまで、われわれ研究グループの調査者自身による、集約的現地調査に基づく、第一次資料を得るように努めた。

地域的にも、広大なアフリカ全域をカバーすることは出来ないにせよ、できる限り広く、かつ文化的にも多様な社会と多様な音文化を対象とするように努めている。

実際には、西アフリカ内陸のサバンナ地帯、ブルキナファソ、マリ、ギニア内陸部、および西アフリカ海岸部熱帯雨林地帯にあたる、ギニア海岸部、コートジボワール、ベナンを代表者の川田順造と研究分担者の鈴木裕之が担当する。東部アフリカ、アビシニア高地地帯、エチオピアを連携研究者の川瀬慈が、東部アフリカ海岸部のスワヒリ文化圏タンザニアの都市部を研究分担者の鶴田格が、東部アフリカ南部ザンビアを連携研究者の松平勇二が、それぞれ分担調査する。

これらの地域で、本研究計画が調査対象とする「音文化」の内容とその問題点は、以下の通りである。

研究代表者の川田順造は、西アフリカ内陸のサバンナ地帯の現ブルキナファソに、おそらく 17 世紀頃から形成され、19 世紀末のフランスによる植民地化まで、多くの地方王朝に分かれつつ存続したモシ王国で発達した、「太鼓ことば」の伝承の現状を研究対象としている。これは、大型球形のヒョウタンの胴に、ヤギの皮を張って素手の両手指先で打つ太鼓「ベンドレ」の打奏音によって、王朝の歴代王の長い句の形をした即位名を「語る」ものである。太鼓の打奏音が言語メッセージを伝えるメカニズムと、太鼓奏者一族（特定

の父系血縁集団だが、内婚集団ではない）の世代から世代へその「語り」が継承されて行く様相を、モシ社会の歴史観では最も古く成立したとされる南部モシのテンコドゴ王朝と、中央部で勢力を拡大し、フランスの植民地化当時最大の王朝だったワガドゥグー王朝（ワガドゥグーは、共和国として独立以後の首都となった）の両者を比較して研究して来た。

太鼓や笛などの器音による言語メッセージの伝達法は、世界各地にさまざまなものがしられているが、これほど長く複雑な言語メッセージを、それも幾世代にもわたって伝承してきた例は、他に類を見ない。サウンドスペクトログラフなど、太鼓の破裂音の周波数成分の分析をはじめとするさまざまな分析による、言語音との対応の探索の結果、言語メッセージの原体というべきものが、声帯と構音器官を通じて口から発せられる代わりに、太鼓のチューニング・ペーストをつけたベンドレの膜面を打つ指先から発せられるという、比喩的でない言語と身体の関係を検討するところにまで至った。

長い訓練によって、太鼓を打つ手の指先の動きが、身体に刻まれた「記憶」となるためには、幼時から一族の年長楽師とともに頻繁に王宮に伺候して、一定の王朝の歴史を「語る」ことを繰り返す必要があり、かつてはそれが可能だったが、学校教育が普及した現在では、それができなくなり、とくに都市化が進んだ首都のワガドゥグーでは、王宮付き楽師の次世代の後継者がいなくなった。就学率が低いテンコドゴでは、まだ後継者はいるが、いなくなるのは時間の問題。

このような状況で、「太鼓ことば」という貴重な無形文化遺産をどうするか、ユネスコに無形文化遺産として登録するには、煩瑣をきわめる申請書作成が必要で、それをワガドゥグーの王の重臣で、教育もあり開発の問題に積極的に取り組んでいる、ラグレ・ナーバに話し、政府の文部・科学大臣にも支持を取りつけ、ユネスコ本部から書式も取り寄せて、ラグレ・ナーバに託したが、結局申請は行われなかった。またもし申請がユネスコに受理され、モシの「太鼓ことば」が無形文化遺産として登録されたとしても、その行く手は定かでない。

このように、音具で表される言語による歴史表象に対して、西アフリカ海岸部熱帯雨林地帯に、現在のベナン共和国中部に形成されたダホメー王国では、高度に様式化された歌と踊りによって過去の代々の王を讃える歴史表象「コトジャ」が形成された。著しく入り組んだ振りと結びついた歌は、その特殊な入り組み方によって、歴史伝承の視覚・聴覚表象としての確かさと、継承を通じての伝承内容の安定を保証している。

西アフリカ内陸のサバンナ地帯にあたるギニア内陸部、西アフリカ海岸部熱帯雨林地帯にあたる、ギニア海岸部、コートジボワールで、研究分担者の鈴木裕之は、グリオと通称されている声の職能集団について、多年現地調査を行って来た。一定の様式をもった声で、人を賞賛する芸は、アフリカで広く、さまざまな形で発達して来たが、とくに西アフリカのグリオは、内婚的集団を形作り、冠婚葬祭において、そこでまつられる人を祖先の系譜の中に位置づけ、弦楽器や木琴などの音具も用いて褒め称え、祝儀をもらう。

現代では、街の酒場などでの生演奏、ラジオ、テレビ出演、カセットテープへの吹き込みなど、より範囲を拡大した声の芸人として、重要な位置を占めている。国際的なミュージシャンとして活躍している者も多い。

鈴木は彼らの活動の社会・文化的意味を、西アフリカ諸国の、植民地時代から独立後のさまざまな政治的状況の中に位置づけて、その変遷を研究してきた。

研究分担者の鶴田格は、東部アフリカ・スワヒリ文化圏タンザニアの、都市部における女性の歌舞集団を一貫して研究し、その社会的機能の変遷を跡づけてきた。特に、スワヒリ語の歌詞がもつ社会的機能の分析で、大きな成果を上げた。

連携研究者の川瀬慈は、東部アフリカのアビシニア高地地帯にあたる、エチオピアにおける、声で人を誉める職能集団アズマリの研究を行ってきた。川瀬は、ビデオを用い、ビデオに収録されている映像を、被験者に見せながら再度インタビューを行うという手法も含めて、アムハラ語を駆使して、きわめて密度の高い研究を一貫して行い、アズマリの変遷をたどってきた。

連携研究者松平勇二は、南部アフリカで広く用いられているが、アフリカ東南部のザンビアでとくに発達した、共鳴箱の上に並べた金属の細長い舌を弾く、通称「親指ピアノ」とも呼ばれてきた音具の、詳細かつ広汎な研究を行ってきた。とくにその音具としての構造の詳細な分析、儀礼における音具としての機能の参与観察の成果は、従来の研究の水準を抜くものである。

４．研究成果

研究課題の根の深さ、対象とすべき地域の広大さから見ても、まだ調査すべきことは多いが、時間の制約の範囲内では、一段階を進め得て、この研究計画の所期の目的は達したと言える。次年度以降もこの課題で、とくに無形文化遺産としての、伝承共同体との関係に注目して、調査研究を進める。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）
①Itsushi Kawase（掲載決定）Visual Anthropology of Ethiopia. *Encyclopaedia Aethiopica, 5.*（査読無し）

② KAWADA Junzo (2012) Réflexions sur les patrimoines culturels immatériels en voie de disparition. *Cultures sonores d'Afrique, Tome V,* pp. 3-14（査読有り）

③ Tadasu Tsuruta (2012) Oral Poetry as a Marginal Art. *Cultures sonores d'Afrique,* 5, pp. 41-63（査読有り）

④ 鈴木裕之（2012）アフリカ音楽事情（１）豊かな音の文化. *音楽文化の創造, No.63,* pp. 26-27（査読無し）

⑤ SUZUKI Hiroyuki (2012) Jeliya (l'art des griots) dans le show-business d'Abidjan : l'art traditionnel de la louange dans la modernization. *Cultures Sonores d'Afrique, Vol.5,* pp. 15-39（査読有り）

⑥ 川瀬慈（2012）The Azmari Performance During Zar Ceremonies in Northern Gondär, Ethiopia. *CULTURES SONORES D'AFRIQUE, 5,* pp. 65-80（査読有り）

⑦ 川瀬慈（2011）精霊の馬 - エチオピア、ゴンダールのザール憑依儀礼 -. Art Anthropology, *5,* pp.64-68（査読無し）

〔学会発表〕（計２件）
① KAWADA Junzo (2011, May. 24) "Un anthropologue face aux métiers oubliés en voie de disparition." Colloque du Forum International des Anthropologues (FIA), オマール・ボンゴ大学

② Itsushi Kawase (2012, January. 7) "The Azmari Performance During Zar Ceremonies in Northern Gondär" First International Conference on Azmari, Hildesheim University.

〔図書〕（計１件）
①川田順造・湯浅譲二（2012）「人間にとっての音･ことば･文化」洪水企画（205 項）

〔その他〕
ホームページ等
・www.itsushikawase.com
・アジア・アフリカ手話言語情報室（Center for Asian and African Sign Languages (AASL)）
http://aasl.aacore.jp/wiki/

６．研究組織

(1)研究代表者
川田 順造（Kawada Junzo）
神奈川大学・日本常民文化研究所・客員研究員
研究者番号：50107835

(2)研究分担者
鈴木 裕之（Suzuki Hiroyuki）
国士舘大学・法学部・教授
研究者番号：20276447

鶴田 格（Tsuruta Tadasu）
近畿大学・農学部・准教授
研究者番号：60340767

亀井伸孝（Kamei Nobutaka）
愛知県立大学・外国語学部・准教授
研究者番号：50388724

(3)連携研究者
川瀬慈（Kawase Itsushi）
日本学術振興会海外特別研究員、受け入れ機関：マンチェスター大学
研究者番号：30633854

松平勇二（Matsudaira Yuji）
日本学術振興会特別研究員、名古屋大学大学院文学研究科 博士後期
研究者番号：なし